

武田泰淳と胡適 「十三妹」を中心に

郭 偉

要 約

我在前稿《武田泰淳与现代中国的知识分子——胡适篇——》（《社会文学》二十号、二〇〇〇四年六月）中、通过分析以胡适为主人公的武田泰淳早期作品《E女士之柳》、初步探讨了武田泰淳对胡适的认识以及接受情况。本稿的课题则是进一步探究胡适的中国白话小说研究对武田泰淳文学创作的影响。

武田泰淳于东京奥林匹克的翌年、即一九六五年七月十二日到同年十二月二十八日、在《朝日新闻》上发表了题为《中国忍者传 十三妹》的连载小说。这就是后来的单行本《十三妹》。就如武田泰淳在连载预告以及单行本的后序中表明了的那样、《十三妹》是抽取了《儿女英雄传》、《三侠五义》《儒林外史》等中国古典小说的精华、并将其脱胎换骨、揉和再造而成的作品。而在现代中国、对这三篇古典白话小说进行了先驱性整理和研究工作的则正是胡适。我认为《十三妹》从素材的选择到作品的构造都受到了胡适研究的不少启发和影响。

本稿首先参照各先行研究成果以及同时期的武田泰淳的其他文章、分析了武田泰淳《十三妹》的创作意图。接着在追溯调查了胡适的白话小说研究与武田泰淳的关联的基础上、以胡适的相关考证论文为线索、理清《十三妹》与其原著素材的关系、探讨了《十三妹》的构造、方法及其独创之处。并尝试凸现了武田泰淳的小说创作与日本的中国文学研究界的互动这一事实、为给《十三妹》在武田泰淳文学世界中的定位做好了准备。

はじめに

「武田泰淳と現代中国の知識人 胡適の場合」(『社会文学』20号, 2004年6月)において、私は、胡適を主人公とする作品「E女士の柳」の分析を通して、泰淳における胡適受容について論及した。今回の課題は、胡適による中国白話小説論の泰淳文学に対する影響の検証である。

『十三妹』は「中国忍者伝 十三妹」という題で、東京オリンピックの翌年、1965年7月12日から同年12月28日まで、朝日新聞紙上に連載された小説を単行本にまとめたものである。『十三妹』についての同時代評としては、駒田信二「反近代の近代小説 武田泰淳『十三妹』」(『朝日ジャーナル』, 1966年7月)、村松暎「波乱万丈 変幻自在 中国清朝小説をもとに」

(『図書新聞』1966年7月), 竹内好「解説」(『武田泰淳全集 第九巻』, 筑摩書房, 1972年6月)の三つが挙げられる。さらに, 最近では, 「日本人によって書かれた中国武俠小説の先駆」という田中芳樹の指摘(「解説」『十三妹』, 中央公論新社, 2002年5月)があり, また, 小嶋知善による論文「武田泰淳『十三妹』論 企図と背景」(『目白大学短期大学部研究紀要』第39号, 2002年12月)も興味深い。

ところで, 泰淳が連載の予告や単行本の「あとがき」において自ら表明したように, 『十三妹』は『兒女英雄伝』, 『三俠五義』, 『儒林外史』など中国の古典のエキスを抽出し, 混ぜ合わせて創り出した作品である。現代中国においてその三つの古典を「白話小説」として整理, 研究するにあたって, 先駆的な仕事をしたのはほかならぬ胡適であった。『十三妹』は素材の選択から構成まで実は胡適の研究から少なからぬ影響, あるいは刺激を受けていたのではないかと考える。

本論は, まず, 前記先行研究を踏まえ, 泰淳の創作意図を検討した上で, 胡適の白話小説研究と泰淳との関連を究明する。それにひきつづいて, 胡適の考証論文を手がかりに, 『十三妹』と三つの原典との関係を腑分けし, 『十三妹』の構造と方法, およびその独自性について考え, 泰淳文学における『十三妹』の位置づけへの展望を試みたい。

1. 武田泰淳『十三妹』の意図

駒田信二と村松暎の書評はともに『十三妹』の単行本が上梓された直後のものである。この作品の本質について, 駒田信二はそれを「反近代の近代小説」とし, 村松暎はそれを「武田氏の知的遊び」とするが, この小説の面白さについては, 両氏ともそれは原典に対する泰淳の手捌きの「自由」「変幻自在」さ, そして, 中国講釈師の手法をたくみに取り入れた泰淳の話術にあると認めているようだ。ただ, 二人の評者はともに泰淳があかした『十三妹』の三つの原典に詳しい中国文学者であるにもかかわらず, 書評という場の性格に制限され, 『十三妹』のあらすじと原典の簡単な紹介にとどまり, 原典との関係性については深入りしていなかった。例えば, 駒田信二は次のように書いている。

この小説は、原典を忠実に、あるいは素直に、あるいはまたひとひねりして書き直した一般の中国だねの小説とは、かなり性格のちがうものということ、また、別個の物語(『兒女英雄伝』と『三俠五義』のほか、『儒林外史』も利用されている)のなかのさまざまな人物が、この一編の小説にどのように組みあわされているかということ、それをここにくわしく見る余裕はないが、『兒女英雄伝』のほんの荒筋を紹介するだけでも、伝えることができそうである。

原典のなかのさまざまな人物が, 『十三妹』にどのように組みあわされているかについては, 後ほど検討することにするが, ここでは, まず, 武田泰淳『十三妹』の創作意図を探ることを通して, 「一般の中国だねの小説」とはどのように性格が違うかを見てみたい。

泰淳は, 連載の予告(「次の夕刊小説」, 朝日新聞夕刊, 1965年7月6日)において「作者の言葉」として次のように書いている。

中国式の講談。むずかしい理くつめきで、わかりやすい読みもの。それが、ねらいである。

日本人に親しまれた「水滸伝」「三国志」のほかに、中国には長編が多い。「児女英雄伝」、「三侠五義」、「儒林外史」その他、利用できる古典のエキスは何でも好き勝手に使わせてもらって、自由に合成酒をつくり出したい。いささかの暑気ばらいの効果があれば、満足である。

泰淳のそのような言葉は通俗志向とも取れるものであるが、その志向は、小嶋知義論文が確認したように、夕刊の連載小説という発表媒体の要求にも合致するものである。だが、この連載予告の前月に出版された『中国の八大小説 中国近世小説の世界』（大阪市立大学中国文学研究室編、平凡社、1965年6月）に収録された、泰淳による「序」の次の一節も見てみよう。

つまるところ、我らは魯迅『中国小説史略』のあの重々しくも充実した宝庫へ、心をむなしくして立ちもどらなければなるまいし、魯迅じきじきの愛弟子、増田渉先生がその第一歩をふみ出されたにもかかわらず、中国長編の雄大と豊富を世に伝える努力において、はなはだしく停滞してしまつた後輩我らの怠慢を反省せざるを得ない。（中略）愛すべき林黛玉や潘金蓮が、いまだにジュリエットやデスデモナの如く、われらにちかきものとなりえていない責任はどこにあるのか。難問は、一つも解決されていないのである。日くれて道とおしといえども、中国奇書研究者の苦難と歓喜はこれからはじまると申さねばなるまい。（傍線は郭偉による。）

右の引用文を読んで想起されるのは泰淳のエッセー「しびれた触手 日本の外国文学者について」（『群像』、1951年6月号）である。そのなかで、泰淳は、外国文学研究者とは、すなわち「民族の触手」であり、中国文学研究者である「触手」としての自分は「全身しびれはてても」、「肉塊の一神経であり一触手であることから逃れられぬ」と書いている。そして、「異国文化の砥石でゴシゴシこすられて、陶醉、或いはあぐらをかいていられる文学者は、日本文学に何物をも加えられぬ」とも言っている。泰淳は研究から創作に転身したにもかかわらず、右引用文の傍線部からもわかるように、1965年の時点に至っても、中国文学研究者としての「触手」という自覚は捨てていないのであった。そのような文脈から考えると、泰淳が小説『十三妹』の「あとがき」において、平凡社の『中国古典文学全集』を読者に強く推薦した意味合いも見えてくるのではないだろうか。すなわち、泰淳は自らの小説、『十三妹』を『中国古典文学全集』と同次元のものであると考えていることになる。ちなみに、前記『中国の八大小説

中国近世小説の世界』は「増田渉教授還暦記念論文集」で、増田渉自身の論文および「知友・門下四十数名」の論文のほかに、奥野信太郎・武田泰淳それぞれによる序文、竹内好による跋文も収録されている。この論文集の出版は、彼らにとって、ある意味での一大行事だったわけである。しかも、『十三妹』の二人の評者を含め、この論文集に文章を寄せた人々の多くは平凡社から出版された『中国古典文学全集』（1958年～1961年）と『中国古典文学大系』（1967年～1974年）の翻訳・編集にも参加している。つまり、『十三妹』の創作は、ある意味では、同世代中国文学研究者の仕事と呼応しつつ、日本文学に何物かを加えるものである。それは、泰淳の言い方をもってすれば、「中国長編の雄大と豊富を世に伝える努力」に属するもので

あり、「愛すべき」十三妹と白玉堂を「われらにちかしきもの」とする「責任」を果たす作業の一つだとも言えよう。泰淳は連載予告で「中国式の講談。むずかしい理くつぬきで、わかりやすい読みもの。それが、ねらいである」と書いているが、『十三妹』の創作においては、新聞連載小説に求められる通俗性に考慮し、娯楽性に富む中国式講談を取り入れ、中国長編のエキスを日本文学に注入しているのである。

2. 胡適の白話小説研究と武田泰淳の関連

泰淳は単行本『十三妹』の「あとがき」で次のように述べている。

十三妹は「児女英雄伝」のヒロインであり、白玉堂は「三侠五義」の人気男であって、共に歴史上の実在人物ではない。小説や講談や芝居の中で自由自在に生きている空想の産物ではあるが、彼と彼女が同じ舞台上で結びついたことは、今まで一回もない。

十三妹と白玉堂とが同じ舞台上で結びついたことは、今まで一回もないということは、事実かもしれない。しかし、同じ論文の中で結びつくなら、行われたことはある。ほかならぬ胡適によってである。

拙論「武田泰淳と現代中国の知識人 胡適の場合」のなかでも言及したが、胡適は、「武田泰淳年譜」(古尚林作成、『増補 武田泰淳研究(全集別巻三)』,筑摩書房,1980年3月)では、現代中国の知識人の中で魯迅と並んで、最初に登場する人物であり、胡適を主人公とする「E女士の柳」は、『中国文学』誌上で発表された武田泰淳の最初の小説である。東京帝国大学の一年生の時、胡適の『白話文学史』をテキストとして使っていたことから推測すると、胡適は、武田泰淳にとって、本格的な、中国白話文学の世界の案内人だったという仮説も十分ありうるのである、と。

周知のように、1917年、胡適は「文学改良芻議」を陳独秀主宰の『新青年』誌上に発表して、白話文学運動の口火を切った。その白話文学主張の一環として、『国語文学史』(北京文化学社,1927年4月),『白話文学史』(新月書店,1928年6月)などを著しつつ、「紅樓夢考証」をはじめ、古典白話小説の中から規範とすべきものを次から次へと取り上げて、多くの作品とその作者について考証を加えた¹⁾。同時に、胡適らの考証を巻頭に掲げ、「新式標点符号」を導入した古典白話小説のシリーズが亜東図書館から続々と出版された。この古典白話小説のシリーズは後ほどいわゆる「亜東本」と呼ばれるようになり、大衆への普及の広さと深さから言って、同時期のほかのどの形式の作品よりも、白話を基幹とする中国新文学ないし中国現代国語の確立に大きく寄与したと考えられている²⁾。『十三妹』の三つの原典も、実は、胡適の考証付で「亜東本」シリーズに入っていたのである。

泰淳の「年譜」,1928年,16才の項目に「『国訳漢文大成』本の『紅樓夢』や、魯迅、胡適などを読みあさり、」とある。確認できたところでは、1928年までに、日本語に翻訳された胡適の著書には『胡適の支那哲学論』(訳者、井出季和太、大阪屋号書店、1927年4月),『古代支那思想の新研究』(楊祥蔭・内田繁隆 共訳、巖松堂書店、1925年9月)などがあるが、胡適ら主導

の白話文学運動については、すでに青木正児によって紹介されていたし、胡適の『五十年來中国之文学』も日本語に翻訳されていたようである³⁾。つまり、中国語の習得がまだ始まっていない1928年の時点で、泰淳が胡適の著書を読みあさったとするなら、その範囲はかなり限られたものと言わざるをえない。日本語版の『中国古代哲学史』と『五十年來中国之文学』を読んだ可能性は非常に高いことになる。泰淳における胡適の『中国古代哲学史』の受容については、上記拙論で取り扱ったので繰り返さないが、ここでは『五十年來中国之文学』に注目したい。

『国語文学史』の中の、1923年3月付「附録 日本訳『中国五十年來之文学』序」によると、『五十年來中国之文学』は、上海の新聞『申報』の50周年記念のために書かれ、新旧文学の過渡期であるそれまでの50年間の歴史を記録したものだいう。その附録の序文には、原書に対する三点の補足があり、その三点目は、古典小説についてのもので、次のようなことが書かれている。

小説は、従来文士に蔑視されてきたが、この何十年間の間に次第に相当認められるようになった。古小説の発見は、尤もこの時期の特色となっている。(中略)近年、私たちは新式標点符号を用いて古小説を翻刻することを提唱している。例えば『水滸伝』、『紅樓夢』の類で、それに歴史的考証と文学批評を加えた。これもこの時期の一種の小さな貢献であろう。

しかも、胡適は『五十年來中国之文学』の第九節では「生きている文学」として白話小説を取り上げ、『十三妹』の原典、『兒女英雄伝』、『三侠五義』を、言語面で優れた「北方の評話」の傑作とし、『儒林外史』を思想面で抜きん出ている「南方の風刺小説」の代表として、紹介していたのである。ちなみに、泰淳が東京帝国大学の一年生の時にテキストとして使っていた胡適の『白話文学史』の中では、北方の文学は「英雄」を描くもの、南方の文学は「兒女」(恋愛や人情)を描くものという言い方をしていたところもあるが、それは泰淳文学でお馴染みの「英雄豪傑」や「才子佳人」という一対の概念の形成に何らかの形で影響を与えているのではないだろうか。岡崎由美は、「女侠は才子佳人小説の枠組みを借りるところから、長編小説に居場所を見つけるようになった⁴⁾と指摘しているが、『兒女英雄伝』は、その題名からもわかるように「英雄豪傑」的ものと「才子佳人」的なものが融合した作品である。いずれにしても、泰淳は、かなり早い時期に、つまり、本格的に中国文学に興味を覚えた最初の段階で、胡適の著作を通して、『十三妹』の原典となる三つの白話小説を、相互に関連を持つものとして、しかも、中国の現代文学と密接な関係を持つものとして、認識した可能性がかなり高いと考えられるのである。

3. 『十三妹』という合成酒の諸成分およびその調合法 胡適の考証論文を手がかりに

泰淳の小説『十三妹』の原典となる三つの白話小説について、胡適は、その著書『五十年來中国之文学』の中では、同時代性のある作品として簡単に紹介したにすぎなかった。しかし、胡適は、それら三つの白話小説についての考証の中で、より具体的な関連付けを与えつつそれらに言及している。例えば、『三侠五義』の考証において、胡適は、十三妹と白玉堂を結びつけた形で言及しているのである。

この本の中で、白玉堂を描くにあたってもっとも力を入れたのは、三十三回から三十四回までの白玉堂と顔査散とが交友するところである。そこでは、突然、金という青年が描かれた。「形のくずれた儒者ずきんをかぶり、身にはぼろぼろの紺の長衣、足には底の無い破れた黒の長ぐつ、顔じゅうにほこりをかぶったさま」、作者は三十七回に至ってやっとはじめてその人物が白玉堂だと表明する。このような唐突な文章は、従来の旧小説にはなかったものである。この種の手法は、同じ時期に世に出た『児女英雄伝』で十三妹の登場を描くときにしか用いられていなかったが、白玉堂と顔査散の交友を描く『三侠五義』のこの部分は、諧謔の面白さの中で厳肅さを帯び、白玉堂の優れたところを描き出しただけでなく、一人の可愛らしい召使、雨墨も描いた。雨墨の活躍があったからこそ、読者は全編に生き生きとした新鮮さ、また情理にかなった自然さを感じられるのである⁵⁾。

泰淳の小説『十三妹』の中での、十三妹と白玉堂との登場の仕方は、まさに胡適が指摘した手法そのままであるし、白玉堂と、十三妹の夫である安公子との交友を描くところは、『三侠五義』の三十三回と三十四回をほぼ丸ごと借用している。言わば、顔査散と雨墨の名前をそれぞれ安公子と金満に変えたにすぎないのである。

また、胡適は『児女英雄伝』の考証の中では、『児女英雄伝』と『儒林外史』とを比較しつつ次のように書いている。

「儒林外史」は、極力科挙時代の社会風習と心理とを模写していて、そこには意識的な諷刺がある。が、「児女英雄伝」の方には、呉敬梓（「儒林外史」の著者）のような思想や見解はない。その思想的見地は、「儒林外史」中の范進や高老先生とほとんど同断であり、従って、文鉄仙の科挙による栄達への崇拜は、范進や高老先生のような連中とほとんど同断である。「児女英雄伝」の作者は、だから「儒林外史」中の人物であり、それ故「児女英雄伝」中の心理も、まさに「儒林外史」の攻撃譏諷する心理そのものである⁶⁾。

文鉄仙こと文康は、『児女英雄伝』の著者であるが、いわゆる「満州旗人」であって、清王朝の支配者側に属する人間である。『児女英雄伝』を書くときにはその家はすでに没落したとは言え、「満州旗人」としての基本的な立場は変わらないのである。彼について胡適は、次のように批判している。

文康は極力科挙制度を讃頌しているが、われわれはこれを読むと、いよいよ科挙の流毒の格外に恐るべきことを感ずるばかりだし、彼は誠心誠意科挙による栄達の羨むべきことを描いているが、今日これを読むわれわれは、彼が、科挙制度の下に於ける富貴・利録崇拜心理の絶好の一大口供状を残してくれた、と感ずるばかりである。（中略）作者が無意識だったからこそ、それらの部分にはいっそう社会史的な価値があるのだ。（注6と同じ）

また、胡適は『児女英雄伝』の価値について、次のように認めている。

「児女英雄伝」は一篇の評話であって、その特別の長処は、生き生きした、垢抜けのしている、軽快で、ユーモラスな言い廻しの面白さにある。内容は甚だ浅薄で、思想はまことに迂腐であるが、しかし、生き生きした言葉と、ユーモラスな面白さは、居ながらにして一般の読者を楽しませ、その浅薄な内容と迂腐な思想を忘れさせてしまう。（注6と同じ）

「児女英雄伝」の作者はわざと講釈師の口調をまねし、物語を進めていくときも、しばしば物語からの脱線に興じることがある。それは、ときには人に嫌気を起こさせるが、往々にして諧謔の趣をもっている⁷⁾。

『十三妹』における泰淳の話術の巧みさを、駒田信二と村松暎の両氏とも賞賛していたが、つまるところ、泰淳は、『児女英雄伝』の話術の面白さを自己流に取り入れたのであると考えられる。また、胡適は同考証の中で、『児女英雄伝』における会話部分の巧みさに注目し、とりわけ方言に由来する会話の土臭さが作品を生き生きとさせていると高く評価していたが、泰淳も作品の中に方言を大々的に導入している。竹内好は、泰淳の小説『十三妹』に寄せた「解説」の中で、「会話に方言を乱用するのも、フザケの度が過ぎるのではないか」と苦言を呈している。それほどまでに、方言の大々的な導入の印象は強烈なものであった。さらに、胡適は、「超人」としての十三妹が、結婚を経て「墮落」してしまったことについて不満を表明しているが、しかし、泰淳の『十三妹』は、結婚後も「超人」でありつづける美しいヒロインなのである。

ところで、胡適による「『三侠五義』序」には「三侠五義」中の名判官である包公こと包龍図（本名は、包拯）⁸⁾という人物の人物像の形成について、次のような興味深い説明がある。

歴史上多くの福のある人物が存在した。（中略）このような福のある人物に、私はかつて「箭塚式的人物」という名称を付けた。小説の中の諸葛孔明が箭を略取するときに用いたわら人形のように、もとは一束の乾いたわらに過ぎないが、ハリネズミのようにたくさんの箭が刺さって、怪我など受けただけでなく、大功をなし、大きな名声まで得てしまう。

包龍図 包拯 も一人の「箭塚式的人物」である。古くから多くの精妙な訴訟案件の話が、史書に記録されたり、民間で流布したりしているものの、一般の人はそれらの話の由来を知らない。それらの話が次第に一人、あるいは二人の人物の話であるかのように変化する。歴史上の名声のいい、夥しい官吏の中で、なぜか宋朝の包拯が民間の伝説の「箭塚」として選ばれ、多くの伝奇的な案件の話が彼の逸話とされ、箭のように彼の身の上に射された。包龍図はついに中国のシャーロック・ホームズになってしまったのである⁹⁾。

この「箭塚式的人物」（「わら人形式人物」とでも訳すべきであろうか）という概念は極めて示唆的である。私は、泰淳の小説『十三妹』の人物像は、まさに胡適の言うような「箭塚式」につくられているのではないかと考える。例えば、十三妹という人物には『児女英雄伝』の十三妹に『三侠五義』の丁月華の逸話が加えられているし、白玉堂という人物には『三侠五義』の白玉堂のほか、同作品の主要人物の一人、南侠・展昭の逸話も加えられている。また、安公子という人物には、『児女英雄伝』の安公子に、『三侠五義』の顔查散や『儒林外史』の匡超人

の逸話を加える、といった具合である。つまり、三つの原典からエピソードという「箭」を取り出し、十三妹、安公子、白玉堂、包公、馬老人など主要登場人物である「箭塚」・「わら人形」に、その「箭」をつきさして、人物やストーリーを膨らませていった、と解釈できるのだ。

そして、前述のように、胡適はこれら三つの作品の同時代性を認め、繰り返しそれらに関連付けて取り上げている。三つの原典の同代性についての胡適の認識は、泰淳の小説『十三妹』の作品構成にも反映されていると考えられる。『十三妹』は百四十五回にわたって連載された長編小説ではあるが、以下のような八つの章に分割されている。「首の話」、「ややこしい話」、「旅の話」、「放浪の話」、「ねずみの話」、「受験前の話」、「試験場の話」、「その後の話」。このような章題は、要するに三つの原典に共通した話柄であったと考えられるのである。一方、この三作の中で、ストーリー、および主人公に一貫性が保たれているのは、『儿女英雄伝』しかない。そのため、十三妹と安公子および安家の人々の物語に、『三侠五義』の白玉堂や包公、襄王、そして『儒林外史』の馬老人などを加えるという手順は、現代風の長編小説を構成する上では、もっとも合理的なものではないだろうか。ここでも、「箭塚式的人物」(わら人形式人物)という概念の重要性が再確認できるのである。

胡適の考証は、いわゆる「亜東本」シリーズの一環として、それらの三つの作品が出版された際に、それぞれの巻頭に序文としても加えられたものであった。「亜東本」は最も信頼され、また広く流布したテキストであったため、泰淳が小説『十三妹』を執筆する際、胡適の考証を目にした可能性は極めて高いと考えざるを得ない。それに、胡適の考証は、この三つの古典小説を研究する者にとって必読書に近いものになっていたと言えるもので、中国文学研究者という自覚を捨てきれずにいた泰淳は、なおさら読まずにはいられなかったであろうと推測できるのである。仮に、平凡社の日本語版『中国古典文学全集』を利用したとしても、『儿女英雄伝』と『儒林外史』の両作品とも「亜東本」に依拠しているし、『儿女英雄伝』の解説では、先ほど引用した当該作品についての胡適によることばが定説として紹介されているからである。つまり、胡適の考証論文から触発を受けた泰淳は、その三つの作品を原酒とみなし、それらをブレンドすることによって、泰淳の言うところの「合成酒」、すなわち小説『十三妹』を製造するという着想を得たのではないだろうか。さらに言えば、そのような合成酒を製造する過程で、胡適の研究からいろいろなヒントや刺激を得たことは疑い得ないのではないだろうか¹⁰⁾。

4. 武田泰淳における「武侠小説」観

泰淳の小説『十三妹』の独自性について考察を加えるために、単行本の「あとがき」にある次のような一節に注目したい。

私の依拠したこの三つの古典のどれにも、もちろん、満州族政府に支配された漢民族知識人の三百年の苦しみなど、おもてだててえがかれてはいないが、本来は、白玉堂ならびに十三妹の出現と普及は、異民族の圧迫、異民族と内通し温存されている政権の腐敗と無関係ではなかったはずなので、その点は、彼と彼女の行動と心理の矛盾として、暗示的に表現しようとしたつもりである。

包公と、その敵対者が、その勢力あらいで大陸を二分しようとしているとき、彼と彼女がどちらに味方し、どのような行動方針にふみ切るかの問題は、かなり現代がかった、なまなましいテーマであって、私のこの作品においてのみならず、諸外国の試作品においても未解決のまま、読者に不安と、期待を投げかけているのではあるまいか。

さて、『儒林外史』（呉敬梓，1746年頃）と『兒女英雄伝』（文康，一八八四年頃）は作者も執筆年代もほぼ確定できるようだが、『三俠五義』は主に講釈師である石玉崑の講釈を記録したもので、複数の人間の手が加わっているとされ、最も古いテキストは、一八七九年だと言われている¹¹⁾。この三つの古典とも、物語の時代背景はそれぞれ宋，明，清とかなり隔たっているにもかかわらず，三作品の成立時期は同じく清の時代であった。泰淳の指摘の通り，「白玉堂ならびに十三妹の出現と普及は，異民族の圧迫，異民族と内通し温存されている政権の腐敗と無関係ではなかったはず」なのである。また，三作とも「大陸を二分しようとしている」勢力争いの物語を内蔵していたのも事実である。私は，泰淳が三作から引き出した，以上のような認識，すなわち，胡適の言及し得なかった認識こそが，小説『十三妹』のもっとも強烈な基盤となっていると考える。また，そのような独創的な認識は，泰淳独自の「武俠小説」観ともつながっているものであると考える。

泰淳による「中国国民党党史など」（『新潮』，1944年3月）の中に次のような言葉がある。

党を創めた人、守った人、背いた人、反抗した人、殺された人、仲の良い人、仲が良くて後に争う人、卑怯な人、忠実な人等。小説にすれば「水滸伝」風な長編、もっと巨大な大作であろう（略）。

現代支那に関する書籍を読む事は、旧小説浪漫の世界を繰り広げる文学的空想魔術の材料手段と称してもさしつかえあるまい。

また，泰淳は「中国の武士道」（『大陸新報』，1945年1月）において，次のようにも書いている。

然し『兒女英雄伝』『七俠五義』など文学史に名をとどめた近代作品の存在を考えると、武俠小説をそう簡単に否定し去る事は出来ない。胡適等の新文学運動以来、純文芸の上では武俠好漢の活躍は許されなくなったが、民衆娯楽の裏になお生存しているからである。

（略）

儒教の聖典は『仁』を尊び『礼』を重んじ、中世の中国文教政策はこの線に沿って維持されていた。しかし中国社会全体の現実的運営は、仁者礼者以外に『中国武士道』中の人物を必要としたのである。

（略）

ひとり文芸の上にとどまらず、民国創造の政治動乱の中で、若き志士達は最初から都市停滞的な国民党を形作ろうとしたのではない。彼等の身命を擲った行動は、実に地方活動的な武俠的国民党から発生した事を忘れてはならない。国民党が中国新武士道を樹立継承し得るや否やは、また武俠的地方民衆を党内に吸収しえるや否やにかかっているのではあるまいか。

引用が少し長くなったが、私の言いたいのは、要するに、泰淳は、民衆に支持されている武侠小说の価値を認め、文芸にとどまらず「武侠的民衆」こそ中国の将来を左右する力だと考え、民国創造の歴史ないし「中国社会全体の現実的運営」を理解するにあたっては儒教の聖典以外に「武侠」という視角も持ちえている、ということである。『武田泰淳全集』に「江湖大俠」という短文が収録されているが、その「解題」によると、それは『<昭和文学全集>35中島敦・武田泰淳・田宮虎彦』(角川書店、1954年4月)の埋め草として使われたもので、泰淳の構想していた長編の書き出しだったという。それは、明らかに「中国の武侠」を内容とするものである。「江湖大俠」の存在も、また「武侠」に対する泰淳の持続的で、並々ならぬ関心を伺わせる。その意味では、泰淳の言うところの「現代がかった、なまなましいテーマ」を内包する小説『十三妹』の続編として、辛亥革命のために命をささげた女性革命家である秋瑾を主人公とする『秋風秋雨人を愁殺す』が書かれたということは、当然の成り行きだと言えよう。文芸世界の虚構の女侠である十三妹と、流血革命に参加した実在の女侠、「鑑湖女侠」である秋瑾とが、ともに不思議なことに日本刀を愛用したという点、さらには両者がともに、豪傑タイプではない夫を有していた点には、単なる偶然の一致を超える、連続性がみられるのである。

5. 結びにかえて 泰淳文学における『十三妹』の位置づけへの展望

泰淳は、エッセー「しびれた触手 日本外国文学者について」において、自分自身を、「中国の呼吸が射しかかるたびに、ビクリビクリと」「痙攣」し、「その痙攣を売り物にする」「触手」だ、と自嘲的に語っている。実際、連載小説『十三妹』の掲載紙である朝日新聞の紙面を概観するだけでも、ベトナム戦争はもとより、国際A・A会議などで、一九六五年の中国が如何に注目を集めているかが理解できる。また、周知のように、一九六五年とは、あの文化大革命がまさに始まろうとしていた時期であり、中日の国交回復の七年前にあたるわけである。このような時代背景のもとで、泰淳の中国への関心が「従来にもまして傾斜していった」¹²⁾ ことは言うまでもない。

泰淳文学における、小説『十三妹』の位置づけを試みるためには、まず、中日にわたる時代背景を念頭に置かなければならないであろう。そして、十三妹という女性像の分析は、「才子佳人」、「女賊の哲学」、「秋風秋雨人を愁殺す」などにおける女性像の系譜をたどる必要がある。また、「武侠小说」という視角からすれば、泰淳の「吉川英治論」などのエッセー、さらに同時期の日本におけるいわゆる「大衆文学」についての論及や、日本の忍者ブーム、台湾・香港における武侠ブームも視野に入れるべきだと考える。

本稿の課題は、泰淳文学における胡適による中国白話小説論の影響の検証であるが、以上論証してきたように、泰淳の小説『十三妹』は素材の選択から構成まで胡適の研究から少なからぬ影響、あるいは刺激を受けていたことは明らかだが、その独自性は泰淳における武侠小説観と関連し、「地方民衆」に注目する泰淳の中国理解ともつながっていると考えられる。

ところで、泰淳文学における、小説『十三妹』の位置づけを考察する際、確認しておかなければならないことがある。泰淳「年譜」1928年、16才の項目にあるような記述、つまり、「『国訳漢文大成』本の『紅樓夢』や、魯迅、胡適などを読みあさり、」というような記述が事実であ

るとすれば、泰淳の現代中国研究にとって、魯迅はもとより胡適もまた極めて重大な存在であったはずである。にもかかわらず、泰淳は、小説『十三妹』単行本の「あとがき」の中で、魯迅の名だけを挙げ、なぜか、胡適については、ついに一言も触れなかったのである。この不可解な点に関しては、さまざまな推測が可能であろうが、ここで、小説『十三妹』に関する、吉川幸次郎の発言を参照しておきたい。吉川による「武田泰淳氏と私」(『新潮』、1976年12月号)の中に、泰淳との関係を回想する次のような一節がある。

かけちがったままに歳月がうつったが、この四五年は、本が出るごとに買った。「中国小説集」で「十三妹」を読み、感心した。というよりも驚嘆した。新聞に連載されていたときは、「児女英雄伝」の翻訳と思い、敬遠していたのである。あなたの小説は、「風媒花」以来、久しく無精しているが、以後は心がけを改めると、礼のハガキに書いた。

私は、「武田泰淳と現代中国の知識人 胡適の場合」において、竹内好と吉川幸次郎との間に行われた論争について言及している。その論争とは、吉川が翻訳した、胡適の著書『四十自述』をめぐる、戦中戦後にわたる論争のことであるが、私見によれば、泰淳は、終始、盟友である竹内を支持していたのである。前記引用の言葉から見ると、吉川は、泰淳の小説『十三妹』を読んでからは、その「心がけを改め」、武田泰淳との、いわゆるボタンの「かけちがい」を解消したようである。その意味では、泰淳の小説『十三妹』は、吉川幸次郎にとって、ある意味での和解の書であったと解釈できなくもないわけなのである。逆に言えば、それまで、その論争の当事者の間においては、安易に「胡適」の名を持ち出すことは、一種の禁忌、タブーであったと考えられるのである。私は、この論争のもたらした深い影響こそが、泰淳の小説『十三妹』単行本の「あとがき」から、「胡適」の名を消し去った、有力な原因のひとつであると解釈しているのである。

そのような論争をも含め、泰淳は、同時代の中国文学研究者の仕事と呼応すべく、小説『十三妹』を執筆していたのであると、私は、あらためて認識するものである。そして、私は、『中国古典文学全集』や『中国古典文学大系』の翻訳・編輯に参加した錚々たる研究者の名前を眺めて、かつてあった「漢学」・「支那学」・「中国学」の鼎立を思い浮かべつつ、中日国交回復までの中国文学研究者の努力に思いを馳せずにはいられないという感懐を新たにする次第である。いずれにせよ、泰淳文学において、小説『十三妹』は、その「あとがき」の表面上の記述とは異なり、単に魯迅のみならず、胡適からの強い影響下にもあった作品として位置づけられる、と、私は結論したいのである。

注

- 1) 朱文華「整理説明」(『胡適全集 第十一巻』、安徽教育出版社、2003年9月)によると、『国語文学史』は、そもそも1921年11月、胡適が教育部の主催した第三回国語講習所の「国語文学史」の講義を担当する時につくった講義録であった。石印版やガリ版などの形で自他によって配られたことがあるが、1927年4月、北京文化学社から活字出版されたテキストも、当時、国外にいた胡適から承認を得ていないので、正式の出版物ではないという。『白話文学史』は、『国語文学史』の改訂版ではないが、関係はある。

- 2) 王中忱「亜東本和汪原放の標点」(「亜東本と汪原放の標点」)(『中華読書報』, 1998年10月21日)を参照した。いわゆる「新式標点」とは、従来の句読点とは異なる句読点表記で、それは、胡適らの提唱する白話文とともに興り、1919年、中華民国の教育部によって、公布され、また全国への普及もはかれたが、まだ、使用される範囲が限られていた。胡適らの後押しした亜東本は、その普及と浸透に大きく寄与した。なお、佐藤一郎・伊藤漱平「近世小説の研究と資料」(『中国の八大小説 中国近世小説の世界』(大阪市立大学中国文学研究室編, 平凡社, 1965年6月)にも胡適の白話小説研究ならびに「亜東本」に関する記述がある。
- 3) 『国語文学史』(北京文化学社, 1927年4月)に収録された、1923年3月7日付「附録 日本訳『中国五十年来之文学』序」によって推測できる。同序の中には訳者の苗字「橋川」しか出ていないが、橋川時雄の可能性が高い。日本語版の『中国五十年来之文学』は未見。なお、今村與志雄「橋川時雄著訳年表」(『文字同盟』第三巻, 汲古書院, 1991年11月)の1923年の項目に、「二月, 胡適『輓近の支那文学』(原題『五十年来之中国文学』。翻訳)東華社 東京」という記録がある。
- 4) 岡崎由美『漂白のヒーロー 中国武俠小説への道』(大修館書店, 2002年12月)
- 5) 胡適『三俠五義』序(『胡適文存(三)』, 『胡適全集 第三巻』, 安徽教育出版社, 2003年9月)を参考にした、郭偉による試訳である。ただし、白玉堂こと金という青年についての描写に関して、「」の中の文は、鳥居久靖訳『三俠五義』(『中国古典文学大系 第四十八巻』, 平凡社, 1970年7月)の翻訳を借用した。
- 6) 常石茂「解説」(『兒女英雄伝(上)』『中国古典文学全集 第二十九巻』, 平凡社, 1969年8月)にある翻訳を借用した。
- 7) 胡適「『兒女英雄伝』序」(『胡適文存(三)』, 『胡適全集 第三巻』, 安徽教育出版社, 2003年9月)を参考にした、郭偉による試訳である。
- 8) 鳥居久靖によると、包公とは、「『昼は陽界を裁き夜は冥界を裁く』といった不出世の名判官として、史上の人としてよりも、なかば神格化された伝説上の人物として七〇〇年後の今日まで生きつづけてきた」存在である。日本の例で言うと、「大岡政談」で有名な大岡越前守忠相のような人物だという。詳細は、鳥居久靖「解説」(『中国古典文学大系 第四十八巻』, 平凡社, 1970年7月)を参照されたい。
- 9) 胡適『三俠五義』序(『胡適文存(三)』, 『胡適全集 第三巻』, 安徽教育出版社, 2003年9月)を参考にした、郭偉による試訳である。
- 10) 三つの原典に関しては、胡適の研究が先駆的なものだが、魯迅や周作人もそれらを取り上げたことがあるし、日本にも、研究者がいたはずである。例えば、『中国古典文学大系』の『兒女英雄伝』の解説者である松枝茂夫は、その「解説」の中で、『兒女英雄伝』に関する自分の過去の文章「兒女英雄伝の面白さ」(『中国の小説』, 1944年)、「紅樓夢反対の小説兒女英雄伝」(平凡社「中国古典文学全集」第27巻附録月報, 1960年)について言及している。松枝茂夫は、中国文学研究会時代からの泰淳の仲間の一である。
- 11) 三つの原典の成立時期などについては、『中国古典文学大系』(平凡社, 1967~1974年)に入っているそれぞれの作品に付された「解説」を参照した。『兒女英雄伝』の解説者は松枝茂夫、『三俠五義』は、鳥居久靖、『儒林外史』は、稲田孝である。
- 12) 兵頭正之助『武田泰淳論』(冬樹社, 1978年5月)

付記 武田泰淳の資料は、原則として『武田泰淳全集』増補版(筑摩書房)に拠っている(未収録のものを除く)。なお、本稿の初校段階で、飯田吉郎の「清末小説の読み方 武田泰淳のばあい」(『大安』第10巻第6号, 1964年6月)も武田泰淳『十三妹』の成立に関係のある資料であることに気づいた。飯田は、当該文章において、1964年当時の日本における清末小説研究の成果 - 武田泰淳の北大時代の学生である中野美代子のそれも含め を紹介した上で、泰淳の初期評論、「『官場現形記』について」(『同仁』, 1934年12月)と「清末の諷刺文学」(『同仁』, 1937年1月)について論評している。その二つの評論は、

武田泰淳と胡適（郭偉）

「彼（武田）が中国文学に関して発表した恐らく最初の、また彼自身かなり意欲的な情熱を示したと思われるものであり、今後清末小説を研究するばあい、現在でもなお貴重な示唆をふくむ」と賞賛している。一時「中国離れ」だとさえ囁かされていた泰淳に対して、「中国への回帰」を呼びかけているように見えなくもない文章である。更なる論及は、次稿に譲りたいが、泰淳の『『官場現形記』について』は、胡適の『官場現形記』に関する研究を踏まえつつ、「都門識小録」を資料としながら、胡適の評価に批判を試みるように展開していることだけを記して、本稿の傍証としておく。ちなみに、『『官場現形記』について』は、『武田泰淳全集』に収録されていない。